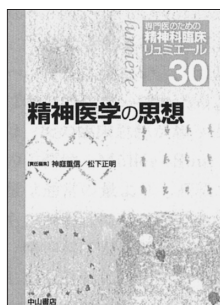


## ■ 書 評



精神医学の思想  
—専門医のための精神科臨床リユミエール 30—

神庭重信・松下正明 責任編集

中山書店

2012年4月

300頁、定価 8,400円

いずれもすでにその道の権威である著者による精神医学の「思想」についての書である。なぜ精神医学で「思想」を知る必要があるのかは、読み進めればおのずと迫ってくる構成になっている。

本書は、松下正明氏の基調論文より始まる。神経病理学者である氏は、5つの次元（詳細は略す）からの患者の理解を主張する。同時に、Jaspers, Minkowski, Binswanger, Meyerらに格別の思い入れを隠さない。彼らの20世紀半ばまでの思想が21世紀の精神医学を考える上でその輝きをまったく失っていないことを述べる。これは、今日の精神病理学者の見解と何ら変わるどころなく、かつそれを凌ぐ造詣の深さを見せる。

しかし、その後すぐにも、「思想」は一筋縄ではいかないことが露わにされていく。加藤敏氏は、精神病理学を専門としながら果敢に遺伝子研究を読みこむ。Crespiらは、人類においてポジティブな選択がなされた遺伝子、創造性にかかわる遺伝子、統合失調症にかかわる遺伝子に重なりがあるという所見を呈示しているという。このような所見は、正常と異常が単線のものではなく、入り子状のものかもしれないことを予感させる。鈴木國文氏は、なぜ精神医学が反精神医学を内に含んできたかを、時代精神に触れながら、今日でもアクチュアルな問題として描き出す。制度分析を実践するフランスのOuryが、精神病患者には社会的疎外と精神的疎外が二重に連結されながら生じ

ているとし、反精神医学批判を述べていることも紹介されている。実践家の発言だけに貴重である。

さらに、下地明友氏は、医療人類学的視点から、今日のスタンダードな研究への痛烈な批判を紹介する。それはたとえば、西欧中心の診断基準をもって非西欧社会の疫学調査をし云々すること自体が、カテゴリー錯誤なのではないかというKleinmanの見解である。また、黒木俊秀氏がDSM成立過程の政治的動きの糸を解説していく博覧強記も、読み応えがある。氏によれば、DSM-IIIの生みの親であるSpitzerは、晩年オルゴン・ボックスを主張し獄中で死んだReichの精神分析を受けた経験があるという。このようなことは単なる逸話ではない。対象との距離を崩さない実証科学的態度を信奉する人に、力動精神医学や精神病理学との関係において複雑な過去を持つ者が少なくないことは、本邦でも周囲を見渡せば容易に例証される。

残念な点もある。森田、満田を、また、土居、安永、木村、中井らを産んだ日本の思想への言及は少ない。それ以上に、それぞれの著者の自前の思想が読みたいと思うのは評者ばかりではなかろう。それでも藤山直樹氏の淡々とした精神分析の現状の叙述の中には、氏の臨床思想が滲み出ている。また、花村誠一氏の内包量（説明は省かざるを得ない）の主張は、Müller-Suurを引いているが、氏独自のものである。ただ、氏は唐突に、内包量は通常量よりも高級な量であると価値判断を持ちこむ。この一文を氏に書かせているものが明瞭にならないと、氏の思想は見えてこない。

精神科医が医師として掌中にしていなければならない客観科学の知見はもちろんある。しかしそれに加えて、その客観科学自体も含んで精神医学が様々な思想の綾の中にある。本書はそのことを知る貴重な機会を与えてくれる。

(津田 均)